

《京都》御所と離宮の栞 ～其の二十八～

桂離宮の歴史（前編）

桂離宮は、現在のように庭園や建築の景観を楽しむだけでなく、茶会やおもてなし等に使用されてきました。今号では桂離宮の歴史について、桂離宮を造った八条宮初代智仁親王と二代智忠親王の御事績とともにお届けします。また、松琴亭にある石畳模様（市松模様）の襖や張付の張替の工事についても併せて紹介します。

概要

桂離宮は、後陽成天皇の弟である八条宮初代智仁親王としひとにより元和元年（1615）頃から別業（別荘）として創建され、二代智忠親王としただによる増改築を経て、寛文2年（1662）頃までに今日の姿がほぼ完成しました。

創建当時から天下の絶景として高く評価され、書院や御茶屋などの建築物と広大な池泉回遊式の庭園が見事に調和する姿は、訪れる人々を深く感動させます。

敷地は、京都市西部の桂川沿いに位置し、南側には八条通から続く府道142号線が接します。この周辺の地は、古くから貴族の別荘が営まれ、藤原道長の桂山荘があった場所です。月の名所として和歌の題材に数多く用いられ、『源氏物語』にここを舞台とした「桂殿」が登場し

ています。その後、道長を祖先とする近衛家の荘園がありましたが、戦国時代の動乱から細川幽斎、古田織部の所領を経て、八条宮の所領地となりました。

桂離宮には書院のほか、松琴亭・月波楼・笑意軒・賞花亭といった御茶屋、また持仏堂である園林堂などが現存しており、江戸時代の様子を今日に伝えています。

桂離宮内にある主な建物は、昭和51年（1976）から昭和57年にかけて書院の、昭和60年から平成3年（1991）にかけて御茶屋等の解体修理が行われ、現在も良好な状態に保たれています。



桂離宮

◆ 初代八条宮智仁親王の桂別業造営

智仁親王は、天正7年（1579）正月8日に正親町天皇の第一皇子誠仁親王の第六子として生まれました。幼名は古佐磨こさまろといいます。古佐磨は、天正16年（1588）には実子のいなかった豊臣秀吉の猶子ゆうしとなり、将来的には秀吉の後継者として関白となる予定でした。しかし、天正17年に秀吉と側室の淀との間に鶴松が生まれたため、縁組を解消して八条宮を創立し、智仁の名を賜って親王宣下を受けました。

智仁親王は幼少の頃より文学に長け、天正16年4月14日後陽成天皇の聚楽第行幸の和歌の会において、わずか10歳でありながら、見事に詠じて群臣を驚かせています。その後、細川幽斎の門弟として歌道や古典文学などを学び、古今伝授を受け（栞其の二十四）、宮廷における古典文学の第一人者となりました。

智仁親王は、文学の他にも馬術や琴の演奏、蹴鞠なども堪能で、その万能な才能は建築や庭園などの工事にも及び、自身の本邸の工事を自ら指導しています。

次いで、本邸の工事の経験を活かして、桂別業の造営を開始しました。最初は、簡易的に宿泊ができるくらい

の簡素な茶屋であったとされ、これが現在の古書院の原型となりました。元和2年（1616）6月29日に兄後陽成上皇の女御である近衛前子が桂を訪れていることからこの頃には完成していたと考えられています。



御物 八条宮智仁親王像

その後も、智仁親王は度々客人を桂に迎え入れながら、さらに別業の整備を進めます。寛永元年（1624）6月18日に桂別業を訪れた相国寺の僧・昕叔顯暲きんしゅくけんたうは、自身の日記『鹿苑日録』に、桂別業には築山や池があり、池には船が浮かび、橋や亭がある。亭上からは四方の山を見渡すことができる、と庭園の状況を記した上、「天下の絶景なり」と絶賛しました。

その後、智仁親王は度々桂別業を訪れましたが、寛永6年（1629）4月7日に51歳で薨去され、跡継ぎである智忠親王はまだ11歳だったことから桂別業は十数年間利用されることなく、次第に荒れはてていきました。



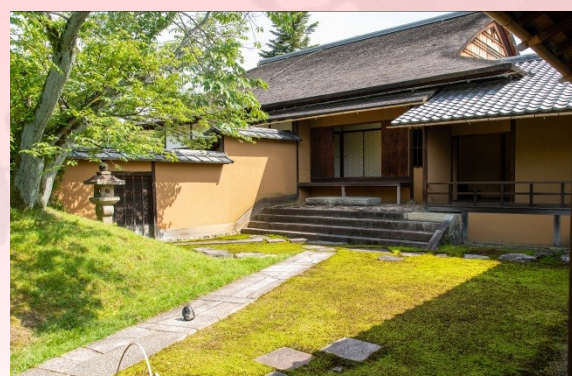
古書院



古書院の月見台



古書院室内



御興寄

◆ 二代八条宮智忠親王の造営

智忠親王は、元和5年（1619）に智仁親王の長男として生まれました。幼少の頃より学問や文学に長け、読書きんしゆくけんたくを教えた昕叔頭暲はその優秀さを褒め称えています。父である智仁親王の学問に励んでほしいという願いに応えるように、智仁親王の薨去から約2か月後の寛永6年（1629）6月1日には自邸に昕叔頭暲を講師として御学問始めを行い、その後も書や和歌、茶の湯などの勉強に励み、一流の文化人へと成長しました。

寛永18年（1641）頃より、かつて父とともに訪れた桂別業の再興を行います。まずは智仁親王が創立した古書院をただ修繕するだけでなく、長期滞在やある程度の数の客を迎え入れることを目的とした増築を行いました。これが現在の中書院です。

中書院の襖や壁張付には、狩野三兄弟といわれる探幽、尚信、安信の墨絵が採用されています。当時、最高の人気を誇る三人が同時に製作にあたることができる年代が、寛永度内裏造営時の寛永18年に限られることから、この頃に中書院が造営されたと考えられています。

中書院造営と同じ頃、寛永19年9月27日、智忠親王と加賀藩主前田利常の娘富子との婚礼の儀が行われまし

た。富子の母は、徳川秀忠の娘で、富子は時の將軍家光の姪にあたります。前田家の経済的な援助もあり、智忠親王は、すでにあった御茶屋の修理、三つの御茶屋の新築、庭園の整備など大規模な改修を行いました。



御物 八条宮智忠親王像

智忠親王の妹である梅宮は、正保4年（1647）頃、池に舟を浮かべて月を眺めた時のことを智忠親王あての手紙に記しており、「誰もが驚き、よそではこんなことはできないと驚嘆していた」とその感動を伝えています。

また、慶安2年（1649）5月30日には、南禅寺の最嶽さいがく元良げんりようや鹿苑寺の鳳林承章ほうりんじようしよう、佐野紹益さのしょうえきら文化人を桂別業に招き、書院で智忠親王自身が茶をふるまった後、5つの茶屋を廻り、その所々で酒を飲みながら舟遊びや舞などの色々な遊びに興じました。

その後も、智忠親王は頻繁に桂別業に滞在し、長い時には、1カ月以上滞在することもありました。



中書院（中央）と古書院（右）



中書院一の間



中書院二の間



中書院三の間（左は二の間）

◆ 後水尾上皇の御幸

明暦4年（1658）3月12日に後水尾上皇がお忍びで桂別業に御幸されました。後水尾上皇は修学院離宮の造営を進められており、そのための視察を兼ねた来訪であると考えられています。そして4年後の寛文2年（1662）4月12日に、智忠親王は後水尾上皇から招待を受け、弟の曼殊院良尚法親王と共に修学院離宮で酒宴や舟遊びなどを十分に楽しみました。

一方、桂離宮では智忠親王が後水尾上皇を迎え入れるために新たな御殿の造営を始められました。その御殿は、欄間や襖の引手に漢字の「月」をモチーフとした意匠（[栞其の六](#)）を採用し、十八種類の銘木を使用した違棚（[栞其の一](#)）、水仙をかたどった釘隠、季節の草花を入れた手桶を模した引手を用いるなど、後水尾上皇を正式に迎えるため、様々な趣向を凝らしたものとなりました。これが現在の新御殿と楽器の間です。御幸門（[栞其の二](#)）や御幸道（[栞其の二十六](#)）を造り、御茶屋の建替や庭園の改修なども併せて行われました。この増改修によって現在の桂離宮の全容が完成したとされています。

桂別業の改修に全力を注いだ智忠親王でしたが、寛文2年7月7日、44歳で新御殿の完成を見ることなく薨去されました。後水尾上皇の御幸は、増改修完成後の寛文3年3月6日に智忠親王の遺志を引き継いだ八条宮三代やすひと穩仁親王が迎えました。

当日は、朝から晴天となり、別業についた一行は、桜や庭石などのある御庭を歩いて素晴らしい景色を楽しみました。御庭の所々にある御茶屋では、様々な飾りつけがされ、御菓子が用意されており、驚くばかりでした。書院ではむぎきり きりむぎ麦切・切麦という軽食が出されました。麦切とは大麦で作った短いうどんのようなもので、切麦とは小麦粉で作ったいわゆるひやむぎです。食事の後は、楼舟に乗って桂川に出ましたが、前日の大雨によって、桂川が増水しており、風も強かったため桂別業に戻り、池に舟を浮かべました。同行した鳳林承章は舟上で「桂別業はあまりに素晴らしくて言葉を忘れてしまう」「白桜が雪のように舞い散っている」と漢詩を詠み、舟を降りた後は、振舞御膳や御茶、俳諧連歌などを楽しみました。

後水尾上皇はその後、11月にも桂離宮へ御幸しています。完成した桂別業をご覧になりながら、智仁親王や智



松琴亭から眺める庭園



新御殿室内



水仙形釘隠



花手桶形引手

忠親王のことを思い浮かべていたかもしれません。

今回は、桂離宮の歴史（後編）として江戸中期～明治期の様子や昭和の大修理などについてご紹介させていただきます。

桂離宮案内図



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215